

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

今を生きるストリート・エスノグラフィーの実践：  
すれ違う権力のまなざしとストリートのまなざし：  
どこにも向かわないストリートの時空：  
希望なき希望：道草を食う：Twan Yang  
“Houseboy In India” より

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 磯田, 和秀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001233">https://doi.org/10.15021/00001233</a>

## どこにも向かわないストリートの時空 ——希望なき希望

### 道草を食う

Twan Yang “Houseboy In India” より

磯田 和秀

成城大学民俗学研究所

道草は、効率性を優先する近代に対する批判という文脈で用いられることがしばしばある。ここでは道草は主体的な行為であり、効率の名のもとに奪われてはならない守るべきものとされている。しかし本来道草とは、従属性においておこなわれる実践であり、守るべきものというよりは、他者の場においてなんとか見出すものではないだろうか。本稿では、植民地期インドを主にハウスボーイとして旅した混血の孤児、トワンヤンの自伝“Houseboy In India”を読み解くことで、道草が他者の場における実践であることを明らかにし、近代性批判としての対象化された道草ではない、ごくふつうの日常実践としての道草の可能性を検討する。

- |                                |             |
|--------------------------------|-------------|
| 1 はじめに                         | 4 ハウスボーイと道草 |
| 2 植民地言説としての“Houseboy In India” | 5 おわりに      |
| 3 潜在的な道草                       |             |

キーワード：道草、従属性、他者の場、ハウスボーイ、植民地期インド

### 1 はじめに

本稿ではストリート実践のひとつとして「道草を食う」ことを取り上げる。道草の実態については、水月 (2006; 2007), 水月・南 (2003), 西川・小伊藤・上野ほか (2003) などによる調査・研究がある。これらは道草を、主として子どもの通学路でおこなわれる寄り道行為と捉え、都市社会における子どもの居場所というより広い文脈の中で道草を位置づけようとしている。しかし本稿では、道草がそもそもいかにして道草としてありうるのかに注目し、道草を食うという漠然とした行為が、他の行為とどのように区別されるのか、そのように区別された行為がどのような意味を持つのかについて、植民地期インドの混血の孤児の自伝“Houseboy In India”を読み解くことを通じて検討した

い。まずはじめに大雑把な見取り図を描いておく。

道草を考える手がかりのひとつは、近代批判の文脈で用いられる道草である。ここでいう近代とは、さしあたって利便性や効率のよさを優先する社会のこととしておく。すなわち、利便性や効率性を重視すると、道草行為は時間や労力の無駄であるとして否定的に捉えられるのだが、まったく逆に、利便性や効率性ばかりが賞賛されることへの批判として、道草が単なる無駄ではなく有意義な活動であることが強調されるのである。たとえば戦後、相模原の米軍基地内にある学校へ通うためにスクールバスに乗せられていくアメリカ人の子弟の姿を見て、哲学者の唐木順三は次のように批判した。

近代の文明は人間から次第々々に途中を奪ふ方向へ動いてゐるが、途中といふ距離を奪つて得た便利といふものと、途中を喪つてしまつた味氣なさとをくらべてみれば、果してどちらが幸福かは疑問であらう。(唐木 1967: 302)

ここで唐木が回復を訴えているのは、いわゆる「道草を食う」ことである。つまり、「途中」＝道草と捉え、その価値を称揚しているのである。ここで唐木がスクールバスに乗せられていく子どもたちに対置するのが、自身の子ども時代の道草の記憶である。

学校までの道草、ふざけたり、けんかをしたり、空想を語り合ったり、かけたり、ころんだりした道草、この一見無駄な途中によって、ほのぼのとしたものではあるが、さまざまな人生経験がつまれていつたやうに思ふ。(唐木 1967: 302)

唐木は「反近代」の哲学者として知られているが、ここで引用したような道草の称揚も反近代の立場からなされていると言えるだろう。長い移動時間は近代化の中で不便で効率が悪いとされるが、それは単なる移動のための時間にとどまるのではなく、重要な「人生経験」の機会でもあるのだというのである。このように（とくに子どもの）道草は、無駄ではなく、それどころかよりよい生を生きるために重要なのだとする見方は広く受け入れられている（cf. 水月 2006; 矢口 2002; 八島・八島 1998）。なぜなら道草は道草にとどまるものではなく、なにか別のもの——多くの場合には子どもの社会化であり、より特殊な例としては将来の仕事——の役に立っているからである。

こうした道草の意義については大いに同意するのだが、しかし、そのように道草を称揚することは、論理が転倒しているだろう。子どもは何かの役に立たせるために道草を食っているのではなく、道草それ自体をおこなっているのであって、それがたまたま何かの役に立つに過ぎない。もちろん、何の役にも立たなかった経験もたくさんあるはずである。

また、道草が何かの役に立つことを強調することによって、役に立たない道草があることが見えにくくなる。たとえば同じエッセイの中で唐木は、知人が飛行機で外国へ行くにあたって「各々何ヶ月がかりの煩瑣な手続」を必要としたこと、それでも行けた人

はまだましで、「一年餘の準備をして、後事を頼んだり、先方へも連絡したりした舉句に、不許可になつてしまつた人もゐる」ことの理不尽を嘆き、「根本は、大空は等質の國際的空路になつたのに、地上には異質の國家や民族がおのおの自己を主張してゐるといふことから来るギャップであらう」と批判している（唐木 1967: 303-304）。

ここで唐木は近代批判ではなく、逆に國家の近代化の不十分さを批判していて、唐突な印象を与える。しかし、指摘したいのはそのような矛盾点ではなく、唐木が評価すべき道草とそうでない道草とを区別している点である。出国のために「何ヶ月がかりの煩瑣な手續」をしなければならぬことや、「一年餘の準備」をした舉句に渡航が不許可になるような不便さは、近代が奪つたような「途中」=評価すべき道草に通じるように思えるのだが、唐木によればそれは道草ではなく、単なる無駄（評価に値しない道草）なのである。反近代的な途中であればなんでも道草として肯定的に評価するわけにはいかないというのが、唐木の姿勢であろう（問題を混乱させないために書いておけば、唐木は道草という言葉を肯定的なものとして扱っているが、本稿では、後述するような理由で、道草を肯定的にも否定的にも扱わない）。

唐木のエッセイに、近代とは別の評価の基準があるとすれば、それは道草が主体的におこなわれるかどうかであろう。ひとまずは、子どもの道草は子どもが主体的におこなうから評価に値し、海外渡航における不便は國家によって押し付けられたものだから単なる無駄である、といえるかもしれない。しかし、それだけでは明らかに不十分である。まずなにより、子どもの主体性といつても、この場合、家庭と学校のあいだを往復する限りにおいて発揮されるものに過ぎない。この往復を前提とする社会秩序に支配されることによって、子どもは道草を食うことができるのである。道草を食う子どもたちは保護者としての親に支配され、教育システムに支配されている。「主体的な道草」を安易に称えることは、このような支配関係を見過ごすことにつながりかねない。それを見過ごすと、道草の真に創造的な側面を捉えきれないのではないか。

道草と支配関係が不可分のものであるとするならば、唐木が無駄と切つて捨てた海外渡航における「煩瑣な手續」は、逆に興味深い視点を与えてくれる。つまり、自分で目的地を定めるといふことは、自分で自分の主となること、言い換えれば自分を自分に従属させることなのだが、國家の定める「煩瑣な手續」に従ふことは、自分の上に國家という主体を認めることである。そして法を遵守する以上、それは現実には認めざるを得ない（「煩瑣な手續」をせざるを得ないし、許可が下りなければ出国することさえできなくなる）のだが、「煩瑣な手續」や不許可を有意義な道草と捉えないのは、國家に対して従属しておりながらも同時に批判的であろうとする態度を意味しているだろう。すなわち、道草という言葉やそれに相当する実践を、肯定的であれ否定的であれ評価するといふことは、ひとつの發話のポジションを示しているのである。

肯定的／否定的を問わず、一般的に道草とは、ある目的地に向かう途中で本筋を外れ

ておこなわれる行為を指すが、ここで見たように、それには行為に先立ってそのような目的や本筋が定められていなければならない、そこにはある従属関係が生じている。従属なしに目的も本筋もなく、道草を食うことはできない。そこで本稿では、(1) 従属関係における (2) 途中で (3) 本筋を離れてなされる行為を、道草と呼ぶことにする。この枠組みに沿って、“Houseboy In India” という植民地言説の分析を試みたい。

## 2 植民地言説としての“Houseboy In India”

“Houseboy In India” (以下、『ハウスボーイ』) の著者のトワンヤン (Twan Yang / 端陽, 1919-1993。姓は不明) は、インド・西ベンガル州の北端、ヒマラヤ山麓の丘陵地帯の標高 1,200 メートルあまりに位置する町カリンボンで生まれた。『ハウスボーイ』によれば、父親は清朝軍の軍人で四川省に駐在していた。母親はカムのチベット人で、トワンヤンの父親と結婚して女の子を産んだ。1911 年、チベット軍により捕虜となった父親は、他の中国人や妻子とともにインドへ追放され、カリンボンに住み着いた。財産や身寄りがなかったので一家はカリンボンのスコットランド教会に入信した。カリンボンは住民の多くがネパール人で、トワンヤンもネパール語を主に話すようになっていた。母親の話すチベット語も父親の話す中国語も、非常に限られた語彙しか知らなかったという。トワンヤンが生まれてまもなく姉と母親が相次いで亡くなり、妹は養子にだされた。6 歳で父親は再婚したが、1 年半ほどで継母は家の金を持ち逃げして離婚。それからまもなく父親も死んでしまう。

7 歳までに妹以外の家族をすべてうしなったあと、父親の遺言に従ってトワンヤンは中国人家族の養子になった。はじめてトワンヤンがハウスボーイ＝サーバントとして働いたのは、カリンボンの名士、デヴィッド・マクドナルドの息子の家であった。その後養母によって売られるようなかたちでシク教徒の毛皮商人のサーバントとして働くことになり、カリンボンを出る。詳細は後述するが、それから約 16 年間、マスターを変えながらインドの各地を放浪した。『ハウスボーイ』に描かれているのは、『ハウスボーイ』の原稿を出版社に送ったところまでで、そのころトワンヤンは 25 歳くらいだったと思われる。

これ以降は、筆者がカリンボンなどで関係者から直接聞いたことなどをもとにしている。トワンヤンはその後、肺を病んだことがきっかけで仕事を辞めて、パトナの結核療養所に入った。さらに故郷のカリンボン近くのカルシャンにしばらく滞在しているとき、『ハウスボーイ』執筆中に結婚した女性と別れた。その後、カリンボンでスコットランド教会の関係者の家にしばらくとどまった後 (木村 1982: 176)、知人のつてをたどって当時独立国であったシッキム王国に行き、情報部員として働いた。そこで 2 度目の結婚をし、子どもも生まれたが、2 度目の離婚をした後は家族を持たず、最後はシッ

キムの首都ガントクの下宿先で病死した。トワンヤンが最期を迎えた家には、彼が描いた数点の絵といくつかの楽器が残されている。

『ハウスボーイ』の正確な執筆時期は不明だが、彼が20歳ぐらいのころから25歳ぐらいのころまで(1939~1944年ごろ)にかけてと推定される。1945年12月から翌46年12月にかけて、雑誌“Asia and The Americas”に13回にわたって連載された。また、1945年には単行本として、John Day Companyから同じタイトルで出版された。

『ハウスボーイ』は、彼のマスターのひとりであるヨハン・ファン＝マーネン (Johan van Manen, 1877-1943) の勧めによって書かれた。ファン＝マーネンはオランダ、ナイメヘン出身の神智学者・オリエンタリストで、1910年に渡印し、神智学協会に勤めたり、いくつかの図書館で司書として働いた後、トワンヤンを雇い入れた1939年ごろまでベンガルアジア協会 (the Asiatic Society of Bengal) の書記長を勤めていた (Enhong 1999)。ファン＝マーネンは過去に3人のチベット人に自伝を書かせたことがあるが (Richardus 1998)、ネイティブに自伝などを書かせることは、植民地における情報収集活動の一環としてしばしばおこなわれていたという (Huber 1998)。『ハウスボーイ』の中でも触れられているが、チベット遠征を指揮した英国軍人フランシス・ヤングハズバンドも、自分のサーバントに自伝を書かせている (Galwan 2001)。もっとも『ハウスボーイ』の執筆がそのような目的をもって進められたかどうかは不明である。

とはいえ、こうしたテキストは言うまでもなく、植民地的な権力関係をその中に刻み込んでいる。『ハウスボーイ』に関して言えば、まずそれは、彼にとって母語でない、サーバントをしているうちに覚えた、そしてファン＝マーネンが教えた英語によって書かれている。先述のようにトワンヤンは中国人の父親とチベット人の母親を持つが、それぞれの母語については、読み書きはおろか話すことさえ不自由であった。彼にとって一番なじみが深いのは、カリンボンのマジョリティであるネパール人の話すネパール語であった。ファン＝マーネンは過去にチベット人に自伝を書かせたときは、彼らの母語であるチベット語を使わせたのだが、トワンヤンには英語で書くことを勧めた。実は、初めての対面で、ファン＝マーネンはトワンヤンにチベット語で話しかけているが、それはトワンヤンにとっては母親の話していたものとは程遠い、ラサの貴族の言葉であったという。

主人は常に、私とはチベット語ではなく英語で話しました。ラバみたいな私と正しいチベット語で会話しても意味がないと分かったからでしょう。そのかわりに私はビジン・イングリッシュを話しました。毎日これを続けているうち、みるみる英語が上達していきました。数ヶ月のうちにどんどん学んでいくことに驚いて、ある日、主人は私にこう言いました。「トワンヤン、君の英語は日々上達しているようだ。これからは読み書きを覚えなさい。そうすれば英語を正しく学べるだろう。もう君は1, 2ヶ月前うちに来たときの君ではない。その調子でがんばりなさい。」 (TwanYang 1945: 133)

ファン＝マーネンは、トワンヤンが最も得意だったはずのネパール語には関心を持たなかったらしい。ともかくこのようにしてサーバントをしながら英語を学んでいたある日、トワンヤンは、ファン＝マーネンに「ライフストーリーを書いてみないかね。インドで今まで体験してきたことをすっかり書いてしまわないかね」と勧められたのだった。

こうして書かれた『ハウスボーイ』の読者として想定されていたのは、トワンヤンの知人や友人や同じ境遇にあるような人びとではなく、ファン＝マーネンを中心とする「サーヒブとメンサーヒブ」であった。トワンヤンの仲間に英語を読めるものはほとんどいないし、なにより、トワンヤンはまず第一に、執筆当時の主人であり、英語の教師であったファン＝マーネンに向かって、この本の原稿を書いていたからである。また、トワンヤンはファン＝マーネンの知り合いの白人に紹介され、彼らに『ハウスボーイ』の原稿のことを語ることもあった。トワンヤンは、「主人は多くの訪問者を迎えたものでした。(中略)ほとんど全員が、私の本について興味を持ってくださいました」(Twan Yang 1945: 178)と書いているが、こうした訪問客には、植物学者 Ronald Kaulback, 探検家 John Hanbury-Tracy, 作家サマーセット・モーム, 探検家テオス・バーナード, アメリカ領事エドワード・グロース, Prince Peter of Greece and Denmark, ベンガルアジア協会会長デヴィッド・エズラなどがいる。トワンヤンがはじめてサーバントとして働いたときの主人であるジョン・マクドナルドは、その父デヴィッドがチベットに長らく滞在したことがあり、それをもとに『チベットの20年』を書いた人物でもある縁から、ファン＝マーネンをしばしば訪れたという。先にあげたフランシス・ヤングハズバンドも、ある日ファン＝マーネンの客として現れ、自分の従者に自伝を書かせたことを語っている。彼らはトワンヤンとその原稿に関心を持った。トワンヤンにとって、こうした「サーヒブとメンサーヒブ」こそが、自分の本の読者であった。

ファン＝マーネン自身は、トワンヤンが『ハウスボーイ』を執筆している最中の1943年に死亡して、出版を見届けることはできなかったが、原稿はファン＝マーネンの知人によってアメリカに送られ、出版された。言い換えると、いったんはファン＝マーネンの拘束からは離れたことになるが、そうは言っても、少なくとも原稿を手放した時点までは、トワンヤンがファン＝マーネンを中心とした欧米の白人社会に向かって自らの来歴を提示した、ということは間違いないだろう。

『ハウスボーイ』は、テキスト内では親や養父母、歴代の主人に対する従属関係を描き、テキスト外ではファン＝マーネンを中心とした「サーヒブとメンサーヒブ」に対する従属を指し示している。先に述べたように、道草が従属することと密接に関係しているのならば、『ハウスボーイ』からはどのような道草が見出せるだろうか。まず、多くの人が道草の原型を見出しているような幼少時、トワンヤンの道草がどのようなものであったかを検討する。

### 3 潜在的な道草

母親と姉をなくし、妹も養子に出されたあと、父親と2人暮らしでビスケット売りの手伝いなどをしながら、トワンヤンは学校に行くようになった。5歳のころのことであった。

学校ではネパール語とチベット語の初級教科書を読み始めましたが、私は好きさえあれば学校から逃げ出していました。私の学校は路上にあったのです。つまり、路上で他の少年たちとゲームをして遊んでいたのです。私はそれでも、おおよそ1年と半年のあいだはなんとか学校に通っていました。学校から逃げつづけたこと、時間を無駄にしていたことがどれだけ馬鹿げたことであったかに気づくようになったのは、12歳のときでした。もとの同級生たちはネパール語をすらすらと読み、上手に英語を話し、簡単に書くことさえできるようになっていたのです。私はどれもできませんでしたが、6、7歳の時はそんなことについて思うことさえありませんでした。(Twan Yang 1945: 10)

学校にまともに行かなかったトワンヤンにとっては、友だちとの路上でのゲームは人生を豊かにする道草ではなく、「馬鹿げた foolish」ことに過ぎなかった。しかしなんの役にも立たないばかりかむしろ人生の害となったとしても、この路上での遊びは道草であった。というのも、ここでトワンヤンは父親に従属し、父親が求める学校教育ならびに家事という目的の途中で横道にそれて道草を食っているからである。ただ、通学路の途中というよりは、家を出て家に帰る途中になされたといったほうが適切かもしれない。学校に行かない理由ははっきりしていないしそれを推測するのも無意味だが、学校に行っている（ふりをしている）あいだは、家事から解放されているということは明らかだからだ。

路上のゲームが本筋を外れた行為であることは、トワンヤン自身が認識している。それは、授業をたまにしか受けなことを父親には明かせなかったことからもしっかりしている。6歳のころ、父親が再婚し、継母となった女性が、トワンヤンが学校に通っていないことを知ったときのことである。

継母は私がきちんと学校へ行っていないことを知ると、壺や鍋を洗うことや水運びや市場への使いなどこまごました家事を全部、私に押し付けました。料理以外のあらゆる仕事が与えられました。まるで私は召使のようでした。父はこのことを知りませんでしたし、学校をサボっていることを自分から白状するのも、継母がばらすのも怖かった。召使あつかいされることのほうが、まだましでした。(Twan Yang 1945: 10)

召使のようにこき使われても父親に学校へ行っていないことがばれるのを恐れているのは、それが本筋を離れた行為だと認識していたからだろう。しかしその代わりにトワンヤンは、道草をする機会をうしなった。あるいは、学校への行きかえりではなくて、

家事のあいまいに道草をするほかなくなったのだが、そのような機会はあまりなかったようだ。幸か不幸か、この継母は、半年ほどあとに家の金を持って逃げ、結局父親とは別れることになった。

7歳のとき父親が入院し、トワンヤンは父親の知り合いであった中国人の家庭に預けられたが、父親は回復することなく病死したためそのまま養子になった。この中国人一家には夫婦と息子4人、娘1人がおり、トワンヤンは6人目の子どもとしてむかえられたが、学校には行かされず、食器洗い、水汲み、買い物などの仕事を与えられた。後にサーバントとして働くようになると、ほぼ同じ内容である。

これらに加えて、日曜日ごとにカリンボンから10数キロ離れたPayungという村に、ビスケットを運ばなくてはならなかった。これはトワンヤンの父親が存命だったころからの彼の仕事で、このことをトワンヤンは「むしろ誇りに」(Twan Yang 1945: 18)思っていた。「山の子どもは小さいときから足が丈夫」(Twan Yang 1945: 18)なものであり、長い山道を歩くことを任されたことで、自分もその一員となったと感じたからである。トワンヤンの実父の仕事を引き継いだ養母は、日曜日のビスケット運びを、トワンヤンに続けさせた。

この山道で、トワンヤンはチベット人の巡礼に出会ったり、大人と道連れになって会話を楽しんだり、夏の高原の美しさや冬の厳しさに触れたり、牛飼いの少年グループと喧嘩したり、大きなニシキヘビに脅かされたりした(Twan Yang 1945: 18-21)。

夏の朝は、澄んだ青空、朝日に輝く山々、木々の深い緑色、北東からの気持ちのいい風、山間を飛びまわる小鳥たちの鳴き声。こういったものに私の幼い心は弾みました。こんな早い時間には人影もまばらでした。途中、4人連れのチベット人の乞食に出会ったこともあります。彼らは祈りの声に合わせて手を叩き、朝のいまごろ家々から漂ってくる香の匂いがしました。(中略)丘のこの斜面からはカリンボンが一番きれいに見えます。北に向かえばカンチェンジュンガという巨大なヒマラヤの雪峰が見えます。太陽の光でまぶしく輝いていて、1秒以上は見えていられないほどでした。私は歩きやすいように杖を突き、嬉しくて口笛を吹きながらホームズ・スクールのある丘に向かいました。ときどき他の大人に追いつかれ、何とかついていきながら会話を交わしたりしました。そういう連れがいるときは、目的地までの道もそう長くは感じられませんでした。ホームズ近辺では夏にはヒルや毛虫がそこらじゅうにいました。道に落ちた枯葉の下から緑の蛇が這い出てくることもあったが、すぐ逃げていきました。私はいつもポケットにパチンコと小石を忍ばせていて、蛇を撃ってやろうとしていました。3,400ヤードごとに休憩しました。(Twan Yang 1945: 18-19)

これらの経験はいわゆる道草の一般的なイメージに近いが、こうしたことに対してトワンヤンは特に価値を見出していないし、養父母も道草としてそれを禁じたりしていない。ここには従属関係と途中が見出せるが、これらを本筋を離れた行為とみなす人物は登場しない。

先に、道草とみなす行為について、行為者の従属した状態と、定められた目的地ないし目的への途中、そして、本筋から離れているという認識、という3つの要素で規定しておいた。2つ目の事例はこの規定から外れている。従属関係における途中の行為を道草であると意味づけるのは、行為をおこなう本人、その人が従属する対象、そして両者を外部から見ると第3者とがあるが、行為者トワンヤンも彼を縛る養父母もそのように意味づけてはいない。第3者である筆者から見れば、山道での経験は横道にそれていないとも見えるし、そうでないとも見える。しかし当事者は誰もこれを道草だとは考えていない。だからといってこれは道草ではないとするのも奇妙なことである。

そこで先の規定に若干の修正を加えておきたい。従属状態と途中とは、道草と名づけられる行為の全体（潜在的な道草）をなし、その行為が本筋から離れていると認識されるのは、従属状態が再確認される時である、と。ある行為について、道草である（行為者は従属状態にある）と認定するのは、ひとつの遂行的な行為である。つまり道草について考えるには、2つのレベルがあるだろう。ひとつは、潜在的な道草と呼んだような、従属状態における途中での行為である。もうひとつはそれを道草であると認定する遂行的行為のレベルであり、それには潜在的な道草行為に対する評価が関わる。本稿では以後、潜在的な道草が対象化されたものをカッコつきで「道草」と記し、両方のレベルを含むとき、あるいはいずれかを問わないときカッコなしの道草という表記を用いることにする。次に、この2つのレベルに留意しつつ、このあとのトワンヤンの生活史を検討していきたい。

#### 4 ハウスボーイと道草

まずトワンヤンの職歴（1927年ころから1945年ころまで）を、『ハウスボーイ』の記述にしたがってまとめておく（表1）。期間、年齢は推定、地名は当時のものである。この中で、⑬だけは、だれも雇ってくれる人がいなかったため、仕方なく自分で始めた仕事である。また⑩、⑬、⑮、⑰、⑱以外はサーバントの仕事である。

8歳のとき、トワンヤンははじめてハウスボーイとして働くことになった（①）。しかしそれ以前のトワンヤンの生活とこれ以後のものが、はっきり異なったものであると言い切れることはむずかしい。というのも、ハウスボーイになったからといって、トワンヤンは決まった給料を受け取って自立した生活を送るようになったわけではなかったからである。

『ハウスボーイ』の記述では、ジョン・マクドナルドのもとで働いていたときにいくらかもらっていたかはまったく不明である。また、その後、シク教徒の毛皮商人、Sirdar Sone Singh のサーバント（②）となって2年ほどして、養父母がトワンヤンをサーバントとして働かせる代わりに50ルピーを受け取ったことを知ったという（Twan Yang

表1 トワンヤンの職歴

	雇用者	期間 (年齢)	給料	主な勤務地
①	ジョン・マクドナルド	1927 年ごろ (8 歳)	不明	カリンボン
②	シク教徒の商人	1931 年ごろから約 2 年 (12 歳から 14 歳)	2 年間で 20 ルピー	カリンボン—カルカッタ— バラナシー—ベジャール など
③	警察官 (1)	1933 年 (14 歳)	月 1 ルピー	デリー
④	駅員	3 ヶ月	月 3 ルピー	ガジアバード
⑤	貨物列車のエンジニア	4 ヶ月	月 4 ルピー	カラチ
⑥	アブドゥル・カリム	不明	不明	カラチ
⑦	肉屋	不明	不明	カラチ
⑧	パールシー教徒の商人	3 週間	月 3 ルピー	キアマリ島
⑨	警察官 (2)	1935 年 (16 歳) 5 ヶ月 以上	月 3 ルピー	キアマリ島
⑩	映画館	1935 年 7 月～36 年 1 月 (16 歳)	月 3～15 ルピー	カラチ
⑪	ドイツ人ダンサー	1936 年 1 月以降の数週 間	月約 20 ルピー	カラチ—ボンベイ
⑫	アメリカ人ダンサー (ビリー)	1936 年春から夏にかけ て 4～5 ヶ月 (17 歳)	月 20～30 ルピー	ボンベイ—カルカッタ
⑬	広東人の靴屋	1936 年夏ごろ 3 ヶ月	月 3 ルピー	カルカッタ
⑭	シアターロードのメン サーヒブ	1936 年 9 月頃半月	月 15 ルピー	カルカッタ
⑮	絵描き	1936 年 10 月頃	なし	カルカッタ
⑯	ヨハン・ファン＝マー ネン	1936 年 11 月～1943 年 3 月頃 (17～23 歳)	月 20～30 ルピー	カルカッタ
⑰	工場	不明	不明	カルカッタ
⑱	クリスマスカード製作 販売	1943 年 12 月頃 (24 歳)	不明	カルカッタ
⑲	アメリカ軍の補給部隊	不明	月 150 ルピー	カルカッタ

1945: 61)。事の真偽はさておき、サーバントという仕事は、トワンヤンにとって自立的な生活を保証してくれるものではなかった。

金だけが問題なのではない。金だけを問題にすれば、トワンヤンは、16, 7 歳くらいのときに、ひとまず安定的な給料を得ている。しかしたとえば、トワンヤンは、ジョン・マクドナルドのもとで働くことについて、主人はやさしく殴ったり怒鳴ったりしないので、養父母のもとで暮らすよりもはるかによい環境だったと記憶している (Twan Yang 1945: 31) ように、主人 (やその家族) の性格や気質もまた、彼の生活と密接に関わっている。主人がやさしいかどうかといったことは、このあともトワンヤンの関心の大きな部分を占めていた。また、土地や家屋といった不動産もトワンヤンは有していないの

で、住む場所や寝るところも主人しだいであった。正確に言えば、食べるものも着るものも、トワンヤンが自分の好みにしたがって選べるものとは限らなかった。生活そのものが従属的であったのである。そのような従属性を、トワンヤンは次のように振り返る。

インドには、自分のサーバントの私生活について、結婚しているかとか、両親はいるかとか、どんな暮らしをしているかとか、何の金を得たのかとか、そういったことを何一つ知らない主人もいます。こういう主人たちは、サーバントを人間とは見ておらず、仕事のために雇い、金を払わなければならないだけの存在とみているのです。同じように、主人ではなく月々の給料だけを愛するサーバントもいます。主人がサーバントを完全に信頼して家族の一員のようにあつかい、サーバントのようなごくふつうの庶民の生活に通じていることは、まずありません。(中略)しかし心の底では私たちサーバントは、家族の一員であるかのように家において、主人を敬愛することができ、敬愛しているから働くのだ、ということ望んでいるのです。不幸なことにそんな関係はめったにみられないのですが。(Twan Yang 1945: 176-177)

もちろん、この一文を見せたはずのファン＝マーネンは、めったにいないようなよい主人として描かれている。ファン＝マーネンは穏やかであったし、衣食住についても特に不満を記してはいない。また、トワンヤンの娘をかわいがって、妻や娘もファン＝マーネンを「おじいさま grandfather」(Twan Yang 1945: 197)と呼ぶようになるなど、「家族の一員」のような扱いを受けていた(少なくともトワンヤンの主観では)ことも書いている。しかしながら、トワンヤンたちは現実には「家族の一員」ではなかった。それは、ファン＝マーネンの死後、彼らには何の遺産も分け与えられなかったことからものはっきりしている。トワンヤンの従属性は、主人との相性だけの問題でもなかった。

さて、この間、トワンヤンが道草を食い、それが解雇につながったケースが③、⑧、⑭の3つある。『ハウスボーイ』というテキストが置かれた文脈を考慮すると、トワンヤンがこの道草をどのように提示しているかは重要である。なぜなら、解雇は主人との関係における危機であり、読者として想定されている白人とのあいだにも緊張関係をもたらす可能性があるからである。とりわけ、執筆当時の主人であったファン＝マーネンがそれをどのように評価するか、ファン＝マーネンに対して自分をどのように提示するかは、トワンヤンにとって無関心であってよいことではないはずである。

③のケースでトワンヤンは、給料が少ないことに不満を持ち、サーバント仲間に④の仕事を紹介してもらった。しかし、それまで特に失敗をしていないので、なにか理由がなければ辞めさせてもらえないのではないかと考えた。

私はひとつの案を思いつきました。ある朝バザールに行き、そのままインド映画を見に行きました。映画館では11時にモーニングショーがかかっていました。とても楽しい映画でした。そのあと私はバザールの散歩を3時まで続けました。帰ったときには、いつもの仕事をするには遅すぎました。女主人は私のことを怒り、英語で「汚い犬」だの「馬鹿」だのと、

ありっただけの悪い言葉でなのしりました。そのときの私には言葉の意味は分かりませんでしたので、まったく気になりませんでした。(Twan Yang 1945: 65-66)

その日、ここをやめたいと切り出すと、トワンヤンの思惑通り、女主人は快く許可した。⑧、⑭のケースでもまた、道草を食っていたことが解雇へとつながったが、③のケースとは違って意図的な道草ではなかった。⑧では友人に会いに警察署へ行ったとき、トワンヤンに興味を持った別の警察官と話していて (Twan Yang 1945: 86-87)、⑭では通りで旧知と話し込んでいて (Twan Yang 1945: 114-115) 帰宅が遅れた。どちらの場合でも女主人に厳しく叱責されたのであったが、トワンヤンは⑧でも⑭でも、すでに仕事に嫌気がさしていたのでむしろそれをきっかけとして仕事を辞めることにした。

意図的であれ無意図的であれ、これらの例では、本稿で定義した道草における、従属関係、途中、本筋から離れることの3つがすべてそろっている。このうち、主人を怒らせるために意図的に道草を食った③のケースでは、このように書くことで、事実上の読み手と想定される「サーヒブ」に対し、自分の手の内をばらしてしまう。しかもこの直後、トワンヤンは自分が平気で嘘をつけることまで明かしている。

これで問題は解決しました。私はうれしくてなりませんでした。(中略) 私が機嫌よく仕事をしているのを見て女主人が、「今日はどうしたの?とともうれしそうだけど」と聞きました。私は思いつきで、今日は自分の誕生日なのだと返事しました。実際、自分にとっては新しい場所に生まれ変わった日でもありました。／ところがイギリス人には面白い習慣があって、誰かの誕生日にはプレゼントを贈ってお祝いするのです。そのようなわけで女主人はたいそう親切なことに、新しい靴を一そろいとチョコレートを一箱、誕生日プレゼントとして私にくれたのです。(Twan Yang 1945: 66)

このような意図的な道草や怠業、つじつまあわせのための嘘といったことは、多くの「サーヒブ」にとってはおそらくすでに承知のことで、サーバントの秘密を暴露したとまではいえないだろう。むしろ、この程度に自分のやり口をばらすことで、トワンヤンは、適度に従順でかつ小ずるいところもあるごくふつうのサーバントとして自己を提示している。それによって、主人の財産に損害を与えるような危険な存在であるかもしれない可能性は背後に退く。嘘についても、「こういうふうには嘘をつくことは本や学校で教わったのではなく、私のような子どもが安全な居場所 (a safe nest) を見つけるために身に付けたものだった」(Twan Yang 1945: 66) と、取るに足りないささやかな嘘であることを強調している。

トワンヤンが、主人を欺くときも従属関係を破壊したりせず、むしろ、それを維持しようとしていることも、読み手を安心させることだろう。意図的か否かを問うたとき③と正反対に見える⑧や⑭のケースでも、トワンヤンは従属関係そのものに異議を唱えているのではない。「もうあなたのためには働かない」(Twan Yang 1945: 87) とは言っても、

ほかの誰かのために働くことにはまったくためらいはない。また、主人（女性である場合が多い）の異常な怒りっぽさを強調することによって、自分の罪のなさを主張している。そのことは、読み手が、トワンヤンを罵る主人と自己とを切り離して考えることの手助けともなっているだろう。

だが、トワンヤンにとってより重要なのは、従属関係を維持することや『ハウスボーイ』の読者を安心させることではなくて、従属関係の中で生きるための手段を確保することのほうである。しかしここで、書き手と読み手の利害が一致しなくなる。というのも、トワンヤンは、道草を食って遅く帰ることを主人はよく思わないことを知っていたが、それが悪いことであるとはまったく考えていなかったからである。これは彼の真意がどうということではなくて、トワンヤンは、主人の側にいる人びとが読むことを承知の上で、道草を食う自分にも責任があるとはまったく記していないということである。

たとえば⑭で解雇された後、トワンヤンは隣に住んでいた友人に、「運が悪かった、メンサーヒブに口答えするなんて馬鹿をしてしまった」(Twan Yang 1945: 115) と事の顛末を話したことを書いているが、悪いのは運と口であって、帰宅が遅れたこととは捉えていない。たとえ道草を食っていても時間内に家に戻ればおそらく何の咎めも受けなかったはずだが、早く帰宅するということが重要であるとさえ書いていない。トワンヤンは、punctualという言葉で覚えたのはファン＝マーネンに雇われたときだったと書いているが(Twan Yang 1945: 123)、新たに覚えたその言葉で、過去の経験を振り返ってみることもなかった。

また、『ハウスボーイ』の原稿を書いている最中、トワンヤンはそれをファン＝マーネンに見せているので、少なくともそれを読んだ主人の顔色は見ていたはずである。にもかかわらず、ファン＝マーネンや「サーヒブ」を不愉快にさせるかもしれないことをトワンヤンが書いたのは、そうとはまったく考えなかったからであろう。それを推測させる場面が、『ハウスボーイ』に描かれている。ファン＝マーネンだけではなく彼の客たちも原稿を読んだのだが、⑭のシアターロードのメンサーヒブについてトワンヤンが書いたものを、客の1人が見つけたのである。先にも述べたように、このメンサーヒブは、トワンヤンにとってはよくない主人であった。

エズラ夫人は私の原稿の二冊目の綴りを取り上げて、目次からシアターロードのメンサーヒブについて書いた章を見つけたようでした。そして夫人はみんなに聞こえるよう、声に出してそれを読み始めました。読みながら夫人は笑い出し、ほかのメンサーヒブも笑い出しました。この、シアターロードのメンサーヒブはイギリス人のサーヒブと結婚していましたが、こちらのご婦人がたには、そういう家の雰囲気になんとなくわかったのでしょう。(Twan Yang 1945: 181)

「ご婦人がた」が笑い始めたのが、トワンヤンがシアターロードのメンサーヒブに口

答えをした場面かどうかはわからないが、読んでいても不思議はない。いずれにせよ、トワンヤンにとっては「サーヒブ」たちがどこを手にとって読むかわからないのだから、読んでもらいたくない記述などしなかったと考えるのが妥当であろう。

その当否はともかく、道草を食ってマスターの怒りを買うのは「運が悪い」ことではないという記述が語っているのは、(潜在的なレベルで)道草を食うことは空気を呼吸するように当たり前のことだということである。トワンヤンにとって、市場へ買い物に行けば人に会い話をするものであり、家にいれば主人や主人の家族や自分と同じサーバントもいるし、単に家の周辺をうろついている者もいるし、近所の人もいて、彼らと言葉を交わすことは当たり前の生活であり、生きている以上、望むと望ままいと向こうからやってくるものなのである。それは否定したり肯定したりする対象ですらない。主人に従属しているトワンヤンにとって、それらはすべて潜在的な道草なのであって、それを道草と認定され評価される(トワンヤンの場合、主人からすべて否定的な評価を下されている)のはまさに「運」の問題であった。

潜在的な道草が空気のように当たり前にあることは、トワンヤンが生活を続けるうえで重要な意味を持っていた。⑧での解雇のきっかけとなった道草は、⑨の警察官との立ち話だったが、この警察官は知りあいが働く警察署で働く警察官で、知りあいを訪ねていったときにたまたま出会った相手だった。また、⑭で女主人の口うるささに耐えかねたトワンヤンは、先述のように道草を食ったことを叱責されたのをきっかけとして辞める。辞めて転がり込んだ先は、その道草の相手であった中国人の少年のいる阿片窟だった。トワンヤンを危機に陥れたかに見える道草は、こうして彼に居場所を与えるのである。

これらの道草は時間に遅れることで顕在化するものだが、顕在化しなかった道草もあった。②の Sirdar Sone Singh についてペシャーワルにいたときのことである。ある朝、いつものように子守をしながら公園を歩いていると、アフガニスタンでの戦闘に備えて配備されていたグルカ兵のひとりに声をかけられた。このときトワンヤンは、主人の命令で、ネパール人の服装をし、ネパール人のクシャトリア(チェトリ)としてふるまうことになっていた。主人のシンが、低いカーストのサーバントを雇っていると思われるのを嫌ったのと、クシャトリアであればトワンヤンがヒンドゥー社会で悪くない待遇を受けられると配慮したからであるという(Twan Yang 1945: 39)。

「お前は俺たちと同じカーストみたいだが、そうか？」

「はい」、私はそう答えました。

「よし、じゃあネパール語で話そう。そのほうがヒンドゥスタニー語より楽だ」

(中略) 私たちは座って長いこと話しました。とりわけ彼らが強調したのは、国境近くのアフガン人を怖がる必要はまったくない、ということでした。「やつらは俺たちグルカを怖がってる。だからお前は俺たちの仲間のふりをすればいい。俺たちがするようにククリをぶら下

げておけ。ベシャーワルにいるネパール人は、兵隊じゃなくたって同じ服を着てククリをいつも持っているぞ。主人に言ってみろ、ククリを買ってくれって。それにククリは腰の左側にぶら下げておくんだぞ。」(Twan Yang 1945: 49)

帰宅したトワンヤンは主人にこの話をして、中古のククリを買ってもらう。この例では時間にも遅れなかった（あるいは時間が問題ではなかった）し、つれていた子どもが事故にあったりすることもなかったので、主人から評価の対象となるべき道草とはみなされなかった。しかし、子守という仕事であり、またネパール人ごっこという主人の命令に従っていた状態での途中であるとは言える。

もう一例を挙げておく。⑫のアメリカ人タップダンサー、ビリーはトワンヤンにとって、給料も十分くれるし人柄も申し分なかったのだが、トワンヤンがカリンボンに帰省したあいだ、急な公演依頼を受けてビルマに行ってしまった。突然主人をうしなったトワンヤンは、カルカッタの通りをとぼとぼ歩くのだが、当てがなかったわけではなかった。

その午後、私はチョーロンギー・ロードを歩いていました。主人の靴を修理してもらいについていった靴屋がそこにあったからです。彼は私を見ると英語で言いました。「お前の主人、あのアメリカ人のダンサー、昨日の夜行っちゃったぞ。何で一緒に行かなかったんだ？」／私はすっかり説明しました。そして、靴屋のマネージャーは私に仕事をくれることになりました。(Twan Yang 1945: 111-112)

ここでトワンヤンが靴屋を頼ることができたのは、以前より靴屋に靴の修理に行っていただけではなく、身の上話や世間話に興じてもいたからだろう。少なくともトワンヤンは靴屋を消費の場としてだけ見ていたわけではなく、靴屋もトワンヤンを客としてしか見ていなかったわけではないのではないか。そうした本来の業務から外れた道草をしていたからこそ、主人の突然の喪失という危機に際して頼る先があったのである。この道草を主人のビリーが道草とみなしたとはトワンヤンは書いていない。

こうした潜在的な道草がトワンヤンに居場所を与えるのだが、重要なのは、これらの多くがトワンヤンの意図的な計画ではないということである。たしかに⑨の警察官とのあいだではトワンヤンを雇う話がすでについていて、その後、道草をとがめた女主人と言い争いになり、解雇されるに至るのだが、行き先が決まっていたことでトワンヤンが女主人に対して強気になったことはあっても、解雇させるために警察官と立ち話に耽っていたわけではない。⑭で立ち話をしていた相手は、トワンヤンとたまたま出会い、旧知の間柄であることが分かったため昔話をしていただけであった。⑭を飛び出したあと転がり込んだからといって、最初からそれを見越していたとはとうてい言えない。また、ベシャーワルでグルカ兵と長話をした結果、ククリを手に入れることができたが、そのククリがなんの役に立ったかはわからない。実際に、アフガン人に見せつける機会が

あったら書いていただろうが（そのほうが主人も喜ぶはず）、ククリは存在すら忘れられてしまったかのようだ。いずれにしてもこうした経験のほとんどは、改めて記述の対象にならず、「サーヒブとメンサーヒブ」の興味を引きそうだったり、役に立ったりしたときだけ記述の対象となるだろう。我々が読むことができるのは、そのようなごく限られた経験でしかないが、その向こう側には無数の潜在的な道草経験があるはずである。

こうした潜在的な道草経験は、ひとまず本を書く役には立ったが、それで身を立てることができたわけではない。トワンヤンにとって潜在的な道草は、そのような意味で「役に立つ」ものではなく、従属的な立場にありながらも人となんらかのつながりを作るとい程度のことで役に立つものであった。とはいえ、トワンヤンのように、自分ではほとんど何も所有しないものにとっては、その程度の人とのつながりを作り出すことは生活と密接に関わってくるし、なによりも愉快なことだったのではないか。

この愉快さは、本来の仕事から外れるということの愉快さ、逸脱することの楽しさとは、少し違っている。たしかに、支配者の裏をかき、ひそかに反抗することもまた愉快なことかもしれないが、トワンヤンにとってそれは関心の外であった。それよりも、すでに持っているものや主人から与えられたものを使って何かを作り出すほうに関心があったように思える。たとえば、ネパール人の格好で過ごしているとき、グルカ兵に話しかけられたが、自分はこんな格好をしているが実は中国人なんだと説明して拒否したりしないことによって、彼らと仲良くなり、主人にククリを買ってもらうことまでできた。

トワンヤンは来るものは拒まないわけでは決してなくて、相手が自分にとって危険なものかどうかを慎重に見極めようとしていることは、『ハウスボーイ』を通じて一貫している。たしかにトワンヤンはあまり警戒しすぎるほうではないようだが、彼の道草を可能にしているのは、出会ったものを受け入れるという開かれた態度というよりも、自分が本当はネパール人ではないことをほとんど気にしていないことのほうであろう。つまり、グルカ兵に話しかけられたとき彼はなんのこだわりもなく「ネパール人」になったが、それは彼がネパール語を話せること、ネパール人の格好をさせられていたこと、ネパール人として振舞うように命じられたことから生まれた関係である。これらは、そのために準備されたものではもちろんなく、たまたまトワンヤンの手元にあったものである。

無論、手元にあるものの使い道は決まっていない。それは一義的か多義的かということでもない。なんにでも使えるかもしれないがなんにも使えないかもしれないものなのである。先に靴屋の例を挙げた。トワンヤンが靴屋を消費の場としてだけ見ていたわけではなく、靴屋もトワンヤンを客としてしか見ていなかったわけではないというのは推測の域を出ないが、トワンヤンは靴屋を「同じ中国人」と捉えていたことは看過できない。実際は、靴屋の従業員たちは広東人であったから、トワンヤンにしてみれば彼らの話す広東語と自分の話す言葉（おそらく北京語の四川方言で、わずかに話せる程度だっ

た)とは、「英語とスコットランド語ほどに違う」(Twan Yang 1945: 112)のものであって、会話の役には立たなかったが、それはトワンヤンと彼らとをつなぐものには違いなかっただろう。

重要なのは、こうした関係が現実の直接的な場において結ばれるとき、「ネパール人」の表象であれ「中国人」の表象であれ、それらは当事者から離れた抽象的な概念ではなく、当事者に張り付いた具体的な実体であるということである。父親が中国人であること、わずかながらも記憶している中国語、顔立ちや体格といったトワンヤンの持ち物が、「同じ中国人」へと結びつく実体である。そのため、靴屋に雇われて一緒に暮らすようになったとき、これらの手持ちだけでは「同じ中国人」という仲間意識を強く持つことはできなかった。「同じ中国人」だから親しくなれるというよりも、親しくなるためなら「同じ中国人」であることに頼らざるを得ないのである。

このように、手持ちのものは限られている。道草の中で出会うものも限られている。それらを使いこなす上で重要なのは、それらがどのように使え、どのように使えないのかを見極める能力だろう。そしてトワンヤンは、決して特別優れた能力の持ち主ではないかもしれないが、従属状態において自分の居場所を見つけ出すために、そうした道草の能力を十分備えていたといえるのではないだろうか。

## 5 おわりに

唐木が、子どもがスクールバスに乗せられることを「途中の喪失」と嘆いてから約40年後、陸上選手として活躍した高野進もまた、「子供をめぐる事件が多い中、『危険だから』とスクールバスで通学する社会になりました。(中略)自動車移動になってしまっただけは、目的地から目的地へ直接移動してしまい、『道草』ができません」(高野2007)と、バスによって奪われた経験を惜しんでいる。現実にはそれほどスクールバスが日本で普及しているかどうかは別として、40年の歳月が加えたのは、バスによる送迎を「子供の安全を考えれば必要なこと」(高野2007)といわざるを得なくしたことだろう。

現代において道草を考えると安全への配慮は不可欠のものとされる。このことをこれまで検討してきたことに照らし合わせれば、潜在的な道草は安全によって道草と意味づけられて批判や評価の対象になる、といえるだろう。トワンヤンの場合は安全ではなく「時間に間に合うこと」が問題だった。時間が問題になるときだけ、彼のふつうの生活が「道草」となるのである。無数の潜在的な道草の中から、「道草」を切り取る時、トワンヤンの主人たちはそれを無駄と断じた。トワンヤンの主人たちにはそれは意味のない行為であり、トワンヤンにとっても取り立てて守るべきものでもない。

しかし、冒頭で唐木の論を検討して明らかになったように、道草を近代社会へのなんらかの批判として肯定的に評価しようとするとき、それは守るべき意義のある行為であ

るとされる。そのとき「道草」はそれをおこなう人が主体的に関わるべきものとされている。「道草」の時間と場所は確保されなければならない。唐木は「途中」という言い方で、それを守ろうとした。高野進は「通学路で『道草』できない社会状況の中で、それに代わる環境づくりをする必要があるのではないのでしょうか」（2007）として、そのひとつの場として自らの主催する「かけっこ塾」を「道草」の場として提示する。また、水月（2006）も、「安心な道くさ」が可能な「安全が保証された環境」の重要性を主張し、そのための方法を提示する。水月の提案は、子どもの「道草」の参与観察をもとにしたかなり具体的なもので興味深い。また、「安全」といっても監視カメラを配置するような対策は、「子どもたちにとって本当によい環境となっているのだろうか」、「絶えず監視され続ける子どもたちは、ある種の息苦しさを感じたりしないだろうか」（水月 2006: 8）と、安全一辺倒になることへの批判も含んでいる。

もっとも、本当に「安全が保証された環境」が道草に適しているといえるのか、監視カメラによって子どもが道草を控えるだろうか、息苦しさを感ずるのはむしろ大人ではないのだろうか、子どもなら監視カメラを使った遊びを考案しないだろうかなどといった疑問もあるが、効率化や安全確保のために奪わそうな道草を守るための方法を検討することは当面必要なことだろう。特に安全が問題化され、それが社会の再帰的近代化と関わっているような現代社会において道草の余地をいかに保つかは、道草のみならず「居場所」の問題として真剣に考えられるべきだろう。

しかしそれと同時に重要なのは、「道草」の背後に無数の潜在的な道草があること、すなわち、従属した状況でおこなわれるある種の生き方があることを忘れないことであろう。というのも、「道草」の時間と空間を確保するための議論の多くは、「道草」の価値を称揚するあまり、一途に道草を食うことを推奨するような奇妙な結果につながっているように思えるからである。道草が論じられる場合にしばしば「子どもの居場所」が問題になるが、狭い意味での「居場所」（フリースクールやフリースクールと呼ばれるもの）が、公的に認知され、価値を付与されていく中で、本来「居場所」にとっては無用のものと捉えられていた専門性が、「居場所」の運営に否応なしに導入されていくことに対する懸念が生じつつある（小沢 2004）。この懸念は道草の行く末とも無縁ではないかもしれない。矢口（1996）が冗談めかして語っているが、学校教育において道草が指導や評価の対象となることさえありうるかもしれない。

本稿では、「道草」と対象化されたものは潜在的な道草と呼んだごくふつうの生活実践のわずかな一部であるという前提に基づいて論を進めてきたが、それは、道草の可能性が（いかなる意味であれ）安全な環境にしかないとするなら、むしろ道草の可能性を狭めることになるからである。道草は「広く生活全般に関わる技法（生活術）としての息抜き」（阿部 1987: 12）と同じく、ごくふつうの生活実践である。一方、その機会を奪われつつある状況において対象化され価値を付与される「道草」は、もはやふつう

の生活実践というよりは、特別なものになりかわっている。しかし道草はごくふつうの生活実践として、近代化や再帰的近代化とは関わりつつ、自律し、個々の具体的な生活の場に張り付いて、独自の世界を形成している。トワンヤンのテキストが教えてくれるのは、このような世界が自分の最も近いところに広がっているということではないだろうか。

## 文 献

阿部年晴

1987 「息抜きの文化的価値」『教育と医学』42 (8): 10-15。

Enhong, Y.

1999 Johan van Manen: The founder of Tibetology in the Netherlands. *IIAS Online Newsletter 19*. International Institute for Asian Studies: Leiden and Amsterdam. 最終アクセス日 (2009年2月1日) (<http://www.iias.nl/iiasn/19/> から Regions > Central Asia へと進む)

Galwan, G. R.

2001 *Servant of Sahibs: The Rare 19th Century Travel Account as Told by a Native of Ladakh*. Long Riders' Guild Press. (初版は1923年)

Huber, T.

1998 A Review of Tibetan Lives. Three Himalayan Autobiographies. *Journal of Buddhist Ethics* 5: 453-457 (Web版 <http://www.buddhistethics.org/5/huber982.html>)

唐木順三

1968 『現代史への試み』東京：筑摩書房。

木村肥佐生

1982 『チベット潜行10年』中央公論社。

水月昭道

2006 『子どもの道くさ』東京：東信堂。

2007 「異なる通学路環境に対する質的評価の違いについて——特定の児童グループによる道の使い分けと発言に注目して」『立命館人間科学研究』13: 9-20。

水月昭道・南博文

2003 「下校路に見られる子どもの道草遊びと道環境との関係」『日本建築学会計画系論文集』574: 61-68。

西川知子・小伊藤亜希子・上野勝代ほか

2003 「地域生活における子どもの居場所——大阪市都心部の小学校3校区の調査から」『生活科学研究誌』2: 85-94。

小沢牧子

2004 「『居場所』の現在について考える」『社会臨床雑誌』11 (3): 17-24。

Richardus, P. (ed.)

1998 *Tibetan Lives: Three Himalayan Autobiographies*. Richmond, Surrey, U.K.: Curzon Press.

高野進

- 2007 「『道草』が人を成長させる」『NIKKEI-NET 日経 WagaMaga』(2007年1月11日) (<http://waga.nikkei.co.jp/health/health.aspx?i=MMWaf1108011012007>)。

Twan Yang

- 1945 *Houseboy In India*. New York: John Day Company.

矢口高雄

- 1996 「私の生き方“道草”がボクの学校だった——銀行員からマンガ家へ『釣りキチ三平』の原点」『公研』(公益産業研究調査会) 34(9): 42-57。
- 2002 『ボクの学校は山と川』(第5回白神自然文化賞記念講演) 最終アクセス日(2009年2月1日) (<http://www.shirakami.or.jp/~kouiki/Shirakami-Bunka-shou.files/koen%20yaguti.htm>)。

八島太郎・八島光

- 1998 『道草いっぱい』マコ岩松訳, 東京: 創風社(原著は1954年)。